

---

# 聖なる夜に 君と

\*Lily\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖なる夜に 君と

### 【Nコード】

N7748F

### 【作者名】

\* Lily\*

### 【あらすじ】

クリスマス記念小説です。新志・新哀・コ哀のそれぞれのカップリングでのクリスマスに因んだ短編集になっております。カップリングは新志・新哀・コ哀です。目次にCPが明記してありますので、好きなCPを選んでお読み下さい

## 新志（前書き）

CPは新志です。苦手な方は申し訳ありませんがbackお願いします。

CPについての批判は一切受け付けませんのでご了承ください。

## 新志

特に予定の入っていない祝日の午後。

昼食を簡単に済ませ、研究も一区切り付いた状態である。

そのためぼつかり空いた午後の時間を読書にでもあてようと、志保はコーヒーを淹れにキッチンへ向かう。

（博士も留守だし、久しぶりに静かな休日をごせるわね。）

現在、志保は大学の研究室に、助手という形で所属している。

それがここ数週間は研究が立て込んでおり、休日でも大学に足を運び、帰宅してからも深夜まで地下室に籠もる日々が続いていた。

更に時間があるときはあるときで、博士や隣人に気分転換だと引っ張り回されていたのである。

そんな最中訪れた自由な時間。

志保は気分良くコーヒーと本を持ち、ゆったりとソファに腰を下ろしたそのとき。

まさに図つたとしか言えないようなタイミングの良さで、阿笠邸の玄関が騒々しく開けられた。

「宮野ー？いるかー？」

自分の名を呼ぶ声を聞くまでもなく、ここが他人の家だとは分かっていないであろう図々しいドアの開け方で、訪問者が誰なのか分かった。

「いないわ。だから出直してきて。」

折角の読書時間が脅かされそうな危機感を感じ、志保はいかにも不機嫌ですという声色と態度で返す。

「お前なあ……ま、良いけど。ちょっと家に来いよ。」

志保から滲み出る不機嫌なオーラをもともせず、平然とそう言い放たれたその言葉に、志保は思わず本に落としていた目線を上げる。

「悪いけど、工藤君。私は今読書で忙しいのよ。用事があるなら後にしてくれるかしら。」

顔を上げ、ソファーから少し離れた所に立っている新一を見れば、飄々とした顔付きで来い来いと志保に向かって手招きする。

その悪びれない態度に、志保の機嫌は益々急降下していく。

そして新一は、志保の眉間に皺が寄りその端正な顔が歪められていくのを、不思議な気持ちで見ている。

「なに怒ってんだ？変な奴だな。早く来いよ。」

「それ、今すぐじゃなきゃ駄目なの？」

「ああ。早くしねえと、出番が無くなっちゃうからな。」

新一の様子とこれまでの経験から、志保が何を言っても、新一は多少強引にしても志保を隣家に連れて行くであろうことは想像に容易い。

無駄な抵抗をして、無駄に体力を使うのは流石に馬鹿馬鹿しいし大気がないと思い、志保は諦めてソファーから立ち上がった。

何を企んでいるのか知らないけれど、下らない用事であったら実験

体にしてやる、とこっそりと思いながら。

重い腰を盛大な溜め息と共に上げた志保に、新一は満足そうに頷くと、来いよと一言声を掛け隣家へ向かう。

外に出た瞬間、12月下旬の冷たい空気が身を包み、志保は大人しく従ったことを早くも後悔していた。

「一体なんなのよ。折角の休日にも。」

数歩前を軽い足取りで行く新一の背中に苦情を漏らせば、いいから付いて来いよ、と返事になっていない返事が返ってくる。掴めない新一の行動に、志保は再び深く息を吐いた。

「入れよ。」

隣に行くだけだったからか、工藤邸の玄関の鍵は開いたままであった。

「玄関くらい鍵掛けていきなさいよ。」

「どうせすぐ戻ってくるんだから良いだろ別に。」

小言を言う志保に、新一は口を尖らせ反論する。

その姿がまるで江戸川コナンだった頃と変わらず、志保は呆れて口を開く。

「あなたってほんと・・・。」

子どもみたいね、と続くはずだった嫌みは、最後まで発せられることは無かった。

リビングに入った志保の目に、クリスマスツリーが飛び込んできたからである。

「ちょっと。工藤君。」

想定外のものがそこにあつた驚きに、志保は一瞬続ける言葉を失つたが、すぐに新一の意図を読み取りうんざりした表情を隣に向ける。

「まさか用事つてこれ？」

「ああ。時間無くてずっと出せなかつたろ？」

丁度志保の目線くらいの高さのそのツリーは、まだ何の飾り付けもされていない状態で鎮座している。

つまり新一は、このツリーの飾り付けをするべく志保を呼びつけたのだ。

「嫌よ。面倒くさい。」

やはり付いてくるんじゃないや無かった、と志保は後悔を強くし、今日何度目かの溜め息を吐く。

「なんだよ。折角買ったんだから飾らなきゃ勿体無いだろ。」

「あなた今日何日か知ってる？」

「23日。」

「どつちみち、すぐにしまわなくちゃいけないのよ？」

「だから急がないと出番無くなるっていったろ？」

このツリーを購入したのは11月下旬。

例によつて新一に連れ出され、二人で買い物に出掛けたときに買ったものであった。

元々工藤邸には、新一が幼少のころからあるツリーがあった。

しかしそれは本物のもみの木であり、わざわざ庭から運び入れなければならぬし、何かと忙しい新一と志保が飾るには少々大き過ぎた。

そのため新一が、偶々目に付いたこのツリーを新しく買おう、と勝手に決めていたのである。

けれど、その後新一は事件に、志保は研究に追われる日々が続き、すっかり失念していたのだ。

「別に今年限りのものじゃないんだし、また来年出せば・・・」

「ぶつぶつ言つてないで、ほら。やるぞ。」

志保の言葉を遮り、新一はツリーの下に置いてあったダンボールから飾りを取り出し志保に手渡す。

手の中にあるベルは新品ではなく、使い込まれたような跡があるため、どうやら飾りは工藤家に元からあったものであることが窺える。それをしぶしぶ受け取ると、志保は諦めたようにツリーに近付いた。

「・・・・・・・・ねえ。」

早く終わらせてしまおうとテキパキと飾り付けを進めていた志保は、さつきから新一が飾り付けている場所を見ると、頭痛を抑えるように自らのこめかみに手をやった。

自分をあたかも悩みの種のように見つめる志保に、新一は訝しげに視線だけをやる。

「あなたそれ、本気？」

「はあ？なにがだよ。」

「その飾りつけよ。ウケ狙いなら面白くないんだけど。」

「……って、わけわかんねえんだけど。」

新一の反応に、そう無自覚なのね、と哀れみさえ感じられるような色を瞳に浮かばせて首を左右に振ると、志保は作業を再開させた。莫迦にされていることだけはとりあえず理解できた新一は、黙って手を動かす志保に面白くなさそうに尋ねる。

「何がウケ狙いなんだよ。」

「良いのよ。気にせず続けて頂戴。あなたの感性の赴くままに。」

「あのなあ。ウケ狙いか、とか聞かれて気にするなってほうが無理だろ。」

少しイライラし始めたのか、新一の声に刺々しさが含まれている。

志保は小さく嘆息すると、それ、と指を指し示した。

白く長い指が指したのは、つい今しがたまで新一が飾っていた場所のあたり。

「あなた、音楽だけじゃなく美術的なセンスも無いのね。どうしてそんな狭い範囲に、キャンドルと天使ばかり飾り付けてるのよ。しかも向こうは綿が密集しすぎでしょう。なのにどうしてその周辺には全く飾りが無いの。」

次々と新一の飾り付けを批難する志保に、新一は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて押し黙った。

「バランスつてもものがあるでしょう。この前吉田さんたちが家でツリーの飾り付けしていたけど、あの子たちでももつと綺麗に飾れて

たわよ。」

「悪かったな。センス無くて。」

無然とした表情で新一は言葉を吐くと、どうにかして志保の納得いく飾りをしようと再びツリーに向き合った。

何とか綺麗に飾り付けようと奮闘している新一を見て、志保は新一に気付かれないように小さく吹き出すと、ツリーの出来を楽しみに残りの飾り付けを急いだ。

「どうだ？これなら文句無いだろう？」

苦戦しながらも完成したツリーを見て、新一は得意げに言う。

「そうね。これならツリーも満足じゃないかしら。」

新一を見ると嬉しそうにニコニコとしており、やっぱり子どものようだと志保はクスリと笑った。

「あとは仕上げだな。」

「仕上げ？」

「ああ。重要なものがまだ無いだろ？」

そう言うと、新一は部屋の隅から綺麗にクリスマス包装がされた、プレゼントのようなものを持ってきた。

「なによ。これ。」

「ちよっと早いけどクリスマスプレゼント。開けてみるよ。」

突然のプレゼントに、志保は目を見開いてそれを受け取ると、緑色のリボンをそつと解いた。

「星・・・？」

中から出てきたのは、サイズのある大きめの星だった。鈍く黄金色に輝くそれには、志保のきよとんとした顔が歪んで写っている。

「これってトップスター？」

「当たり前。やっぱりツリーには天辺に飾る星が無いと始まんねえだろ？」

「でも、これ新品でしょう。わざわざ買ってきたの？」

志保の手の中にあるそれは、ずっしりとした重厚感があり、決して安価なものでは無いことが窺い知れる。

もしかしたらアンティークのものなのかもしれない。

何故他の飾り同様、トップスターも工藤家のものを使わなかったのか、更にどうしてわざわざラッピングしてまで志保に手渡したのか、不思議そうに志保は星をまじまじと見ている。

新一は戸惑ったような志保の様子に笑みを零し、彼女に問い掛けた。

「トップスターの意味、分かるか？」

「ベツレヘム。三賢者を、幼子キリストのもとへ導いた星のことでしょう？」

「そ。でも、知ってつか？こういう意味もあるんだぜ。」

「え？」

「守られた約束。」

守られた約束。  
ぼつりとその言葉を繰り返す志保から、新一は彼女の手にある星をそっと取る。

「覚えてるか？元の姿に戻ったときに俺が言ったこと。」

その問い掛けに返事はせず、志保は当時の新一の言葉を思い起さず。忘れるわけが無い。  
忘れられる筈も無い。

「これからも、ずっと俺の側にいろよ。」

あのととき新一は、志保をその温かい腕に納めながらこう言ったのだ。

「あの約束、ちゃんと守ってくれただろ？おめえはこうやって、俺の側にいてくれるんだから。この星は、その証。」

トップスターを軽く撫でつけながら、新一はゆっくりと言葉を紡いでいく。

「イギリスでは星じゃなくて天使を飾るらしいから、おめえの母さんイギリスの人だし、そっちと迷っただけだよ。今の俺たちには、こっちが相応しいかなって。」

差し出されたトップスターを志保は再び受け取り、ジッと見つめる。

「相変わらず、気障なのね。」

「わりいかよ。ったく、ちょっとは喜べよ。」

「……………ええ。ありがと。」

トップスターを抱き締めるように腕の中に抱え、志保は穏やかに微笑む。

思いがけない感謝の言葉と志保の柔らかな表情に、新一は一瞬目を見開いたがすぐに口元を緩め、志保の腕を軽く引く。

「ほら。これは宮野のものなんだから、おめえが飾れよ。」

「そうね。」

新一の晴れやかな笑顔に、志保は目が覚めるような鮮やかな笑みで返すと、志保は手を伸ばしてその輝く約束の証を飾り付けた。

\* E N D \*

## 新志（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

クリスマス小説を書こう！と決めたとき、真っ先に思い浮かんだのがこの二人でツリーを飾るというエピソードでした。

でも、ただ飾らせて「綺麗だねー」じゃつまんないかな・・・と思いついて調べているうちに、トップスターに「果たされた約束」なる意味合いがあることを知り、これはもう使うしか無いだろう、と思いこんなストーリーになりました。

ちなみに庭から本物のもみの木を運び入れる、というのは私の友人宅で毎年行っていることだそうです。初めて聞いたときは驚愕しました笑。

## 新哀（前書き）

CPは新哀です。苦手な方は申し訳ありませんがbackお願いします。

CPについての批判は一切受け付けませんのでご了承ください。

## 新哀

慌ただしい一日が過ぎ、哀がようやく落ち着けたのは風呂から上がった後であった。

濡れた髪をタオルで拭きつつリビングへ戻ると、そこにはソファで寛ぐ新一の姿があった。

「あら工藤君。まだいたの？博士は？」

「ああ。ちよつとな。博士は地下室にいるつてよ。」

クリスマスイブである今日。

クリスマスくらい、と新一は今日明日だけは探偵業に勤しむつもりは無いらしく、一日自宅でのんびりしていたようであった。

一方哀は、少年探偵団の面々でクリスマスパーティーをしており、料理の準備に朝から追われており、彼らがやって来たらやって来たでその相手をするのに忙しかった。

「楽しかったか？あいつらとのパーティー。」

「ええ。賑やかなのも悪くないわ。あの子たちの相手は少し疲れるけど。」

「ははっ。確かに。あつちは現役小学生だからな。」

「テンションと体力が違うのよ。」

嘗て自分もその輪の中にいたときのことを思い出しているのか、新一は目を細めて頷いた。

江戸川コナンがいなくなっても、変わらず少年探偵団を名乗って元気良く活動している彼らにとって、現役探偵である新一は尊敬に値する存在らしく、新一を見かける度に事件の話やせがむ事が多い。基本的に事件の話をするのが好きな新一は、小さな友人たちに嬉し

そつに事件の概要を語っていることが殆どだが、さすがに今日はゆつくりしたかったのか、暇ならパーティーに來ないかという博士の誘いを断っていた。

新一がこれば子どもたちの相手が二分の一、あるいはそれ以下になるであろうことを期待していた哀は、小さな探偵たちお気に入りのお名探偵の不在をそつと恨んだのであった。

「で、私に何か用かしら？」

首を傾げて新一の顔を覗き込むように見る哀に、新一は苦笑して口を開く。

「よく分かったな。おめえに用があるつて。」

「博士が地下室にいるのに、私以外の誰に用があつて待つてるつて言つのよ。」

「それもそつだな。」

新一は一つ頷くとソファから立ち上がり、言葉を紡ぐべく口を開きかけたが、何故か躊躇するようにその口を閉じた。

その様子を訝しげに見つめて、何か言い難いことなのかと予測したため、哀は敢えて何も言わず黙っている。

「いや。まあ、大したことじゃねえんだけどよ。」

真剣な瞳で自分を見る哀に笑みで返して、新一は頬を軽く搔く。

そして右手を哀の小さな頭に下ろすと、その柔らかな絹のような髪をぼんぼんと二、三度撫でるように手を上下させた。

その予想外の行動に、哀は切れ長の瞳を見開いて新一を見上げる。

「おめえ、今日はそろそろ寝るよ。もう遅いんだし。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ？」

ようやく発せられた新一の言葉。

しかしそれは哀の想像していたどの台詞とも異なっており、それまでの新一の様子からそれなりに重要なことを聞かされるのだと思っていた哀は、なんて事のないその言葉に思わず間抜けな声をあげた。

「遅いって、まだ九時前だけど・・・・・・・・・・というか、言いたかった事ってそれ？」

「でも子どもの身体じゃ夜更かしはキツイんじゃないの？それに小学生の就寝時間は九時が基本だろ？」

どこか満足げにそう言い切る新一に、哀は言い返す言葉も続けられずに啞然としてしまう。

そんな哀にはお構いなしに、新一はソファーに置かれていた何かを手に取り哀に突き出した。

眼前に差し出されたそれに、哀はそれまで啞然としていた顔を歪めて半ば睨むように新一を見据える。

「ほら。受け取れよ。」

「念のため聞くけど、これ何。」

「見てわかんねえ？靴下だよ。クリスマスの子どもの枕元には定番だろ？」

な？と得意そうに口角を引き上げて、新一はその毛糸で編まれたその靴下を哀に押し付けようとする。

「どうしたのよ。いきなり保護者意識にでも目覚めたの？」

先程から小学生だの子どもだの言われて、見た目はともかく中身は二十歳近い哀は不快感を露わにして冷気のたつぷりと含んだ声で言葉をぶつける。

腕を組み、イラついたように眉根を寄せ口元を歪める哀の姿に、新一は苦笑して靴下を持ったままの手を引っ込める。

「わりいわりい。そう反応すると思ったから言い辛かったんだ。別に莫迦にしてるわけじゃねえから、んな怒るなよ。」

「別に怒ってないわ。一体何を企んでいるのか疑っているのよ。」

「ばーろ。何を企むっていうんだよ。」

「じゃあ何？」

「……………前に俺と博士とでさ、決めたんだ。」

新一の口から博士が出てきたことで、どうやら彼も一枚噛んでいるらしいことに気付いた哀は僅かに態度を軟化させ表情を緩める。

「決めたって、何を？」

真意の掴めない新一の言葉に、哀は不機嫌さを和らげて今度は単純に疑問を投げ掛けるように問う。不思議そうに上目遣いで自分を見る哀に、新一は少し考えた後、ゆっくりと口を開いた。

「俺さ、お前が元の姿に戻らないって聞いたとき、正直、少しショックだった。」

「あ……………」

トーンを落とし、自嘲気味にそう話す新一のどこか寂しげな表情に、哀は自分の中にチクリと棘が刺さったかのような痛みを覚える。

新一にとって、江戸川コナンはあくまで存在しない偽りの姿。真実を追い求める探偵にとって、偽りの姿から真実の姿に戻ることは、深く考えるまでもなくごく当然で自然なことであったのだろう。だから、偽りの姿で生き続けることを決めた自分を新一は理解できずツラく思うのだ。

新一の言葉からそう考えた哀は、悩んだ末の決意だったとは言え新一を傷付ける結果になってしまったのかもしれない、と思い悔やんだ。

「ごめんなさい……」

搾り出すようにそう小さく呟いた哀は、申し訳なさそうに表情を暗くさせ俯いている。

「や、別に灰原を責めてるわけじゃねえよ。おめえはゆっくり大人になれば良いさ。」

あらぬ誤解を哀に与えてしまったことに気付いた新一は、自らの軽率な発言を呪いつつ慌ててフォローの言葉を口にする。

その優しい響きで紡がれた言葉に、哀は俯いていた顔を上げ恐る恐るといった様子で新一を窺うと、ポンツと新一は哀の頭を軽く叩いて柔らかく微笑む。

「それでさ、博士と話してたんだ。」

「だから、何を？」

「宮野志保が子どものころ出来なかったことを、灰原哀には全部経験させてやるっ、って。」

その言葉に、哀の顔は驚きに染まる。

確かに組織で育ってきた宮野志保は、年中行事はおろか、極当たり

前の日常生活さえもろくに送る事が出来なかった。

何気ない毎日の中にある小さな楽しさに気付けるようになったのは、灰原哀の姿になり博士や新一、少年探偵団の面々などと慌ただしくも賑やかに日々を過ごせるようになったからであった。

「だからさ、こうやって枕元に靴下ぶら下げて、サンタが持つてくるクリスマスプレゼントにわくわくしながら眠りにつけるように、灰原にもなって欲しいんだ。普通の、子どもみたいにさ。それが、俺と博士の願い。」

「でも、それって今更じゃないかしら……」

「そんなことねえって。来年からは、プレゼントが楽しみすぎて中々寝付けないくらいまでにしてやるさ。」

そう、悪戯っぽくウインクを飛ばしてみせる新一に、哀は苦笑するとその小さな掌を差し出す。

今度はきょとんとして突き出された手と哀の顔を交互に見つめ首を傾げる新一に、哀もまた悪戯っぽく微笑を称えて言う。

「それ。くれるんでしょう？靴下下げ忘れて、プレゼント貰えなかったら困るもの。」

照れ隠しのように可愛らしく首を竦めてみせる哀に、新一は顔を綻ばせて大きく頷くと、毛糸の大きな靴下を哀に持たせた。

「おやすみ。温かくして寝ろよ？」

「ええ。おやすみなさい。」

手にぶら下げた靴下をひらひらと振って自室へ戻ろうと二、三步前進する哀を、新一は微笑んで見送る。

すると突然哀が足をぴたりと止め、振り返って新一のことを見上げ

るので、新一は少し屈んで哀と目線を合わせた。

「プレゼント、楽しみにしてるわよ？サンタクロースさん。」

新一と視線を交わしながらそう言って笑った哀は、くるりと踵を返してまた歩き出した。

（子供騙しかもしれないけど。でも、そうね。）

新一は来年からと言っていたけれど、今夜も既に、すぐには寝付けそうにない。

案外単純だった自分に驚きつつ、そしてそんな自分が意外と嫌ではないことにも更に驚きつつ、哀は満たされた気持ちで自室へと向かった。

\* E N D \*

## 新哀（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

新志を執筆しているときにも感じましたが、私はやっぱり志保／哀ちゃん想いな新一を書くのが好きなようです。

そしてそれに対して戸惑いつつも、受け止めていく哀ちゃんが好き、というかそういう状況が書きやすいです 笑。

もし灰原哀の姿のまままで生きていくのなら、今まで経験できなかった沢山の日常を体験させてあげたいなあと思います。

子ども扱いされることに彼女は不快感を感じそうですが、子どもだからこそ楽しめることもあるわけで、それを思う存分まさに“子どものように”満喫して欲しいな、というのが私の願いです。

## コ哀 前編（前書き）

CPは中学生コ哀（+探偵団）です。苦手な方は申し訳ありませんがbackお願いします。

CPに対する批判は一切受け付けませんのでご了承下さい。

## コ哀 前編

「クリスマスパーティー来ないって、どういうことよコナン君！」

退屈な話が続く終業式や、憂鬱な通信簿の返却。寒風吹き荒ぶなか面倒くさいこと極まりない大掃除などを漸く終え、うんざりしたように机に突っ伏していたコナンの頭上から、ソプラノの声が降ってきた。

顔を上げるとそこにはコナンが予想した通りの人物、吉田歩美が腰に手を当て仁王立ちしてコナンを見下ろしている。

いつもならくるくるとよく動く愛らしい大きな瞳も、今は吊り上っており明らかな怒りが含まれている。

何故自分がこんなにも歩美に怒りをぶつけられているのか、身に覚えのありすぎたコナンは嫌々ながらも返事を返す。

「いちいち聞くなよ。知ってるくせに。」

「何それその態度。クリスマスはみんなで博士の家でパーティーが恒例行事なんだよ？8年目にしてすっぱかすなんて冷たいよ。」

「別に俺がいなくても良いだろ？お前から楽しくやれよ。」

あまりにそっけないコナンの態度に、歩美は怒り心頭と言った様子でコナンを睨んで言った。

「だいたい、哀ちゃんと喧嘩してるから会いたくないだなんて。コナン君男らしくないよ。」

頬を膨らませる歩美の姿に、コナンはバツの悪そうな顔で視線を逸らす。

「別に、喧嘩してるわけじゃねえよ。あいつが勝手に怒ってるだけで・・・」

「もうっ！本当に素直じゃないんだから。さっさと謝って仲直りしたら良いのに。」

「何で俺がつ。へそ曲げてんのはあつちだつてのー！」

「そういう所が素直じゃないんだよコナン君は！」

イラついたように声を荒げる2人に、帝丹中学2年C組の教室は一時騒然となる。

この二人が8年来の幼馴染であることは周知の事実だが、彼らがこうして言い争いをしていることは珍しいため、ギャラリーはなんだなんだと興味津々な様子である。

バチバチと火花を散らす勢いの2人に、ちょうど良いタイミングでもう一人の幼馴染が割って入ってきた。

「おめえら声でかすぎだぜ？廊下まで響いてたぞ。」

コナンと歩美の2人分はあるつかというような大きな身体を持つ、小嶋元太が呆れた顔をしてそこに立っていた。

その手には学生鞆があり、帰る準備は万全といった様子である。

「元太君。そうだ！元太君もコナン君に何か言つてよー。クリスマスパーティー来ないって言うんだよ？酷いよね！？」

元太を自分の味方に引き入れようとわーわーと訴える歩美と、いかにも機嫌悪そうに頬杖をついて視線を落としているコナンとを見比べ、元太は面倒くさそうに口元を歪める。

「どうでも良いけどよお。コナンと灰原が喧嘩してる俺らまで気

まずいんだよ。だからとつとと仲直りしろよな。」

「そうだよ！だからほら。今すぐA組行って哀ちゃんに謝ってきなよ。」

「A組の前さつき通ったけど、灰原まだ教室にいたぜ。早くしねえとあいつ帰っちまうんじゃないか？」

「だってコナン君！ほらほら急いで鞆持って！」

「だーっ！もうお前らうるせえっての！関係ないだろほっ」とけっ。」

ついに我慢の限界が来たのか、コナンは椅子から勢い良く立ち上がりそう吐き捨てるように怒鳴ると、乱暴に鞆を引っ掴んで足早に教室を後にしてしまった。

そのコナンの後姿を、歩美は怒りながら、元太は呆れたように見送った。

「灰原さん。まだコナン君と喧嘩中なんですか？」

その頃2年A組では、帰り支度をしていた哀に、同じく幼馴染である円谷光彦が不安げに声を掛けていた。

自分に投げ掛けられた光彦の言葉に、哀はプリントをファイルに収めていた手を止め光彦に視線を送る。

「歩美ちゃんが心配してましたよ。まあ最も、歩美ちゃんの怒りはコナン君だけに向けられているようですけど。」

今日辺りコナン君に食って掛かるんじゃないですかね？と鋭いことを洩らしつつ、光彦は溜息を吐いた。

「別に。喧嘩してるんじゃないわよ。向こうが勝手に怒っているだけなもの。」

「じゃあ、どうして灰原さんまでコナン君を避けてるんですか？」

「うっかり近付いて、あの人に理不尽な怒りをぶつけられたら不快だからよ。」

「……コナン君。クリスマスパーティー来ないみたいですよ。」

光彦が切り札のつもりで発したその言葉も、哀には効果が無いらしく平然としてあらそう、などと言っている。

哀は机の中から通信簿を取り出し、それをファイルに無造作にしまつとファイルごと鞆に放り込んだ。

中身を見るまでも無く、哀の成績はオール5であろうことは容易に想像できる。

帝丹中学始まって以来の秀才、と専らの評判である哀とコナンが定期テストで学年1位を逃した事は今のところ無い。

最も、コナンの場合は音楽の評定が残念なことになっているのだが。

「良いんですか？」

「何が？」

「このままモヤモヤした状態で、下手したら1年終わっちゃいますよ？スッキリさせておいたほうが良いと思いますけど。」

「別にモヤモヤなんてしていないわ。向こうはどうか知らないけど。」

「

パチンと音を立てて鞆を閉じると、それを右手に哀は椅子から立ち上がる。

「帰るんですか？」

「いいえ。図書室に寄って本を返してから帰るわ。じゃあね円谷君。またクリスマスに。」

早口にそう言っただけか逃げようように立ち去る哀を見つめながら、素直じゃない難儀な2人を思い、光彦は深く溜息を吐いた。

「光彦君！」

「帰ろうぜー光彦。」

自分も帰り支度をしようとして席に戻った光彦に、教室の前扉から聞き慣れた声が掛けられた。

俯いていた顔を上げると、そこには保育園からの幼馴染である見知った2人の姿があり、光彦は笑顔で返す。

「ちょっと待ってて下さい。……あれ。コナン君は一緒にや無いんですか？」

光彦が首を傾げると、それまで笑顔を浮かべていた歩美の瞳に怒りが浮かんだのを見て、光彦は自分の予想が当たったのだと確信する。

「コナン君なら先に帰っちゃった。ぜーったい哀ちゃんに会いたくないからだよ。」

「相当むきになってたよなあ、コナンのやつ。」

「そうですね。灰原さんも図書室に寄っていくって言って、たった

今出てつちやいましたよ。」

「うん。さっきそこで哀ちゃんに会ったから聞いた。クリスマスにねって言ってたけど、哀ちゃんも絶対コナン君が来ないこと気にしてると思う。」

歩美は断言するようにそう言い切ると、親友のことを心配しているのであるう不安げな表情で下を向いてしまふ。

常日頃から口喧嘩は日常茶飯事のような2人であるため、少々の口論ではもう気にしなくなっていたが、今回の喧嘩はいかにも長すぎる。

コナンと哀が口をきかない目も合わさない、という状態が既に1週間以上続いているのである。

友だち思いである幼馴染3人は、なんとかクリスマスまでに2人を仲直りさせようとずっと考え込んでには気に掛けていた。

「もうこうなったら仕方ないね。ちょっと強引だけど、そうでもして無理矢理仲直りさせるしかないみたいだから。」

歩美がゆっくりとそう告げると、一体なんだと元太と光彦が訝しげな顔をする。

そんな2人に視線を送り、鞆から携帯を取り出すと歩美はにこりと笑ってみせた。

「嘘つくのはいけないことだけど・・・今回だけは許して貰おう。」

歩美の意味深な台詞に、元太と光彦は不安げに顔を見合わせた。

## コ哀 前編（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

クリスマス中の更新が出来なくて申し訳ありません（>< ;  
一通り書き上げてはいたのですがどうも納得がいかず、修正に手間  
取っていました。

私の中で中学生探偵団において、歩美は哀>>コナンなイメージで  
す 笑。

世話焼きな歩美を書くのが楽しかったです。  
後編も早めにアップ出来るように頑張ります。

## コ哀 後編(前書き)

CPは中学生コ哀です。このCPが苦手な方は申し訳ありませんが  
backお願いします。

## コ哀 後編

クリスマス当日。

哀は帝丹中の校門前にいた。

パーティーは夕方からであるため、午前中のうちに必要な物を買出しに行こうと歩美から誘われていたからである。

買い出しくらい自分一人で行くから大丈夫だと一度は断ったのだが、哀ちゃん一人にやらせるわけにはいかないからと歩美が主張したため、哀は好意に甘えることにしたのであった。

(遅いわね………何かあったのかしら。)

華奢な腕に巻かれた腕時計をみれば、約束の時間を十分以上オーバーしている。

コナンや元太ならともかく、歩美が待ち合わせに遅刻することはあまり無いし、もし理由があつて遅れるとしても歩美は必ず携帯に連絡をくれる。

何の連絡もなく遅刻してきた彼女は、少なくともここ数年間の記憶では思い当たらず、哀は不安を感じて携帯のメモリーから歩美の電話番号を呼び出した。

通話ボタンを押そうとした、まさにそのとき。

「灰原？おめえなんでここに………」

聞き慣れた、しかしここ数日は殆ど耳にしなかった少年の声が届いて、哀はハツとして顔を上げる。

するとそこには、二、三メートル先で呆然と立ち尽くしているコナンの姿があった。

哀はコナンと居合わせた偶然に一瞬驚いたが、すぐに自分たちが嵌

められたことに気が付いて苦々しい思いで溜息を吐いた。  
それはコナンも同様だったらしく、不機嫌そうな顔を作ると、歩美のやつ・・・と恨めしげに呟いている。

「やられたわね。こんなベタな手に引つ掛かるなんて迂闊さったわ。」

「・・・ああ。あいつらがこういう悪知恵働くこと、すっかり忘れてたぜ。」

「そうね。誰かさんの悪影響だね。」

「誰の事だよ、それ。」

哀の小さな皮肉にもコナンは反応し、半目で哀を見返す。

そんなコナンのいちいち刺々しい視線を、哀は首を竦めるだけで軽く流してコナンの姿を見てから浮かんでいた疑問を口にする。

「それより、あなた今日来ないんじゃない？どうして約束をキャンセルした人がその買い出しに来ているのかしら。」

哀は嘲笑するような表情を浮かべ、形の良い耳を見せ付けるように無造作に髪をかきあげる。

その仕草が中学生とは到底思えない妖艶なもので、何となくコナンは哀から目を背けてぶっきらぼうにぼそぼそと呟いた。

「この前歩美が電話してきて、パーティーには絶対来いだのついでに買い出しも手伝って一役買えだの捲くし立てられたんだよ。」

適当にあしらってすっぱかそうと思っていたが、逃げたら元太君に何本でも背負い投げして貰うからね！と恐らく本気であろう脅しを電話口の向こうから掛けられ、重い足を引きずるように運んできたのであった。

小学校から柔道を習い始め、現在も柔道部の主将として実績を残している元太に華奢なコナンが投げ飛ばされたら、いくらある程度の受身は取れるとは言え身体に大ダメージを残すことは必至である。しかし、歩美に脅しを掛けられて怖気づいて来た、なんて哀には口が裂けても言いたくないコナンは、その辺りの事情は敢えて伏せる事にした。

「あらそう。なんだかんだであなたも女の子の頼みには弱いよね。」  
「なんだよ人を女好きみてえに……っておい！」  
「なによ。」

もう会話をする必要は無い、と言わんばかりの態度で哀はコナンに背を向けすたすた歩いて行く。

言い逃げされそうになったコナンは、慌てたようにその背中を小走りに追いかけた。

「何処行くんだよ。」

「今日の目的は買い出しよ。そして私が待ち合わせていたのは吉田さんであって江戸川君、あなたじゃない。だからあなたを待って一緒に行く必要も無いでしょう。」

「んだよそれ。つつか素直じゃないのはいつものこととして、おめえ何でそんなに拗ねてんだよっ。餓鬼みてえだぞいい年こいて！」

横に並んだコナンがそう怒鳴ると、哀はびたりと歩みを止めコナンのいる右へと顔を向ける。

その瞳には、熱湯をも一瞬にして凍りつかせそうなほどの冷徹な色が宿っており、そんな哀の絶対零度な視線にコナンはぎくりと身体を揺らした。

「一体どこからつつこめば良いのか分からないのだけどそうね。と

りあえず、どうして私が拗ねてることになっているのか聞かせてくれるかしら。」

「ど、どう考えたって拗ねてるだろ。俺のことあからさまに避けてたし、今もそんなふうに怖い顔して。」

「勝手に機嫌損ねて避けていたのはそつちのほうでしょう!？」

コナンの台詞に、聞き捨てならないと哀はすかさず言い返す。

道の真ん中で言い合う二人の姿は、いくら当人たちが本気とは言え傍目にはクリスマスに喧嘩している残念な中学生男女のそれではなく、道行く人々は苦笑しつつも微笑ましげな視線を二人に送っている。

そんな周囲の生温かい視線に気付いたのか、それともただ単に立ち止まってまで言い争うのは時間の無駄だと判断したのか、哀とコナンはどちらかともなく早足に歩き出した。

相手と違う道を行くのも逃げるみたいでなんとなく癪だったので、二人は仕方なく肩を並べて一緒に歩いている。

予報ではホワイトクリスマスになるかもしれないと、お天気キャスターが笑顔で告げていたことを思い出し、コナンは重い気持ちでどんよりと分厚い雲に覆われている空を見上げた。

きっかけは、些細な事だった。

いつもの言い合いで、いつも通りの皮肉の応酬。

そしていつもであれば、コナンが哀のどちらかが適当にあしらうなり一歩引くなりしてその場は収まり、また何事も無かったかのように変わらぬ会話を再開してきた。

しかしそのときに限って何故か互いに一歩も引かず、次第にエスカレートしてしまった。

そのため何となく仲直りをする機会を逃し続け、益々気まづくなり意地を張る結果を引き出してしまったのである。

二人が不穏なオーラを漂わせつつ一定の距離をとりながら、会話も無いまま歩き続けて約十五分。

目的地と思われるスーパーに到着した。

自動ドアを抜けた所に積み上げられている買い物かごを取ろうと哀は手を伸ばしたが、それより先に別の手が伸びカゴを持っていった。

驚いて哀がその手を追うと、しまった、とバツの悪そうな様子で顔を歪めるコナンと目が合う。

このスーパーは哀がいつも学校帰りに夕食の買い出しに使うので、所属するサッカー部が休みのときなどコナンも哀に付き合っぺて一緒に来るのが度々ある。その際決まってカゴを持つのはコナンであり、ついいつもの癖で自らカゴを取ってしまったのである。

どうしようかと手に持ったカゴを見つめ立ち尽くしたコナンであったが、敢えて戻すのも意地になっているようだと思い、仕方なくそのままカゴ持ちをすることにした。

皮肉の一つくらい飛んでくるかと思っただが、コナンの予想に反して哀は黙って大人しく付いてくる。

「何買っただよ。」

先に進んだものの、どのコーナーに行けば良いのか分からなかったコナンはぶっきらぼうに視線を送って尋ねる。

「え？ああ、とりあえず野菜かしら。」

「ん。」

もう買う物は決まっているらしく、哀はテンポ良く目当ての物をカゴに放り込んでいき、そのたびコナンの腕に掛かる重みは増してい

く。

「おい・・・一体どれだけ買ったよ。」

「あとお肉だけよ。」

「何作るんだ？」

「ローストチキン。定番だけど、良いでしょう?。」

「別に、何でも良いけど。」

そっけないコナンの言い草に哀は軽く睨むと、お肉取ってくるからここで待っていて、と指示したすた歩いていった。

哀の背中を見つめながら、深く溜息を吐きながらずしりと重いカゴを床に置く。

喧嘩したくて、しているわけじゃない。

歩美の言う通り、自分は本当に子ども染みていると思う。実年齢を考えれば情けない事この上ないため、認めたくは無かったけれど。

こんなお膳立てをしてもらっても、結局一緒で、  
気まずい距離感は縮まらないまま。

(莫迦みてえ・・・・・・・・)

一方哀も、肉売り場を前にして、ぼんやりともの思いに耽っていた。光彦にはああ言ったが、哀もコナンを避けていたのは違えようの無い事実であった。逃げているみたいで情けないから、あんな風にか言えなかっただけで。

彼らに余計な心配を掛けさせるのは勿論哀の本意では無い。けれど結局今もコナンを避けてしまっている。

(莫迦みたい……)

漸く買い物済ませ、レジで清算をする。

肉売り場から戻ってきた哀が心なしか落ち込んでいるようにも見えたコナンは、隣でせつせと袋詰めをする哀に時折視線を送るが、哀は気が付かないようどこかぼんやりとしている。

珍しい哀のそんな姿は気に掛かるが、生まれ付きの素直じゃなさが邪魔をして、声が掛けづらい。

そんな自分に舌打ちをしつつ、コナンは二袋分になったビニール袋を両手に持つ。

「ちょっと、片方持つわよ。」

「良いよ。こんくらい別に。」

ありがとう、という言葉が喉まで出掛かるけれど、つつかえたようにそれ以上言葉は上がってこない。

いつもなら、何てことなく言える言葉さえも、今日の自分には重いと哀は可愛くない自分の性格を嘆く。

「雪……」

スーパーのドアを抜けて外を出た瞬間、哀の少し前を歩いていたコナンが急に立ち止まり、空を見上げて白い息とともに小さく呟いた。その言葉に釣られるように哀も空を仰ぐ。

そこには低く垂れ込めた一面の雪雲から、ふわりふわりと羽のように白い雪が舞っていた。  
人々は皆一様にして空を見上げ、子どもたちは初雪に歓声を上げながらはしゃぎ回っている。

「当たったわね、天気予報。ホワイトクリスマスになりそうだって、今朝言っていたから。」

「だな。どつりでやたらと寒いわけだ。」

「ほんとね。」

哀はその白い掌を身体の前にそっと差し出すようにして、まるで蝶が舞うようにゆったりと落ちてくる雪を受け止める。  
積もることなくアスファルトに滲みこんでいく雪をコナンは目で追いつけながら、ぽつりと落とすように言葉を洩らす。

「灰原は雪が似合うな。」

突然のコナンの言葉に、哀は手を出したまま目を見開いてコナンを見返す。

「何？いきなり……」

「や、何となくだけどさ。似合う。」

そう言ったときコナンはそのまま黙り込み、じっと舞い振る雪を見つめている。

積もることは無くても、その小さな冬の妖精たちはコナンと哀の立つ世界を浄化していくようで、そう思うと自分たちの心にもその白さが染み渡っていくような気がしていた。

「わりい。」  
「ごめんなさい。」

唐突とも言えるタイミングで、二人ほぼ同時に発せられた謝罪の言葉。

それにお互いハツとして、慌てたように顔を見合わせる。ぽかんとした互いの顔を見つめながら暫く沈黙したあと、コナンも哀も小さく吹き出した。

そうして幼い自分たちを笑い飛ばすように、肩を震わせる。

「なんだよ。俺ら莫迦みてえじゃん。」

「まったくくだわ。いつの間にかあの子たちに、精神年齢追い抜かれていたのかも？」

「うげーそれ嫌だなあ。一応二十代だせ中身は。」

「素直じゃないから仕方ないかもね。」

「意地っ張りなところもな。」

「あなたがね。」

「お前もだろ。」

そう言い合いながら、寒さも忘れて二人は笑い合う。

そこには刺々しさはなく、相変わらずの会話が繰り広げられるだけ。ひとときしり言い合ったあと、コナンは両手に持っていたスーパールの袋のうち、片方を哀に差し出した。

「あら。持たせるの？」

「ああ。こつち軽いから。」

実際は全くそう思ってなどいないくせに哀は、仕方ないわねといった様子で眉を顰めてみせながら受け取る。  
その直後、哀の掌が温もりのあるものに包まれた。

「こつしたほうが温かいだろ？」

「まあね。こつしてると、普通の中学生になった気分だわ。」

「普通の中学生の、カップルだろ？」

「ばか。」

寒さのせいだけでなく仄かに染まった哀の横顔を見ながら、コナンは哀と繋いだ手を強く握り締めた。

「あいつら、もう博士の家に来てるぜきつと。」

「心配掛けちゃったものね。謝らなきゃ。」

「いいんじゃないか？謝りはしなくても。」

「何故？」

「ごめんじゃなくてありがとうって言ったほうが、喜んでくれるだろ？あいつらなら。」

コナンの言葉に哀は微笑み、こつくりと頷く。

ひらり、ひらりと優雅なワルツを踊るように降りそそぐ雪の中、コナンと哀は、きつと二人を暖かく迎えてくれるであろう仲間の待つ家へと急ぐ。

ありがとうを、伝えに行くために。

仲睦まじく歩く二人の間には、行きにあったような不自然な距離は、もう無かった。

\*  
E  
N  
D  
\*

## コ哀 後編（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

そして、今さらクリスマスかよ！という遅れた更新になってしまい  
申し訳ありません（<x>）

しかもなんかクリスマス色薄いし・・・

コ哀編はまず設定を練る段階から方向性が決まらず、やっと書き出したのは良いけど今度は主役二人の動かし方で悩み。

結局ベタな感じに収めました 笑。

でもやっぱりコ哀は中学生が書いていて一番楽しいなーと思ったので、またチャレンジしたいです。

で、ストーリー自体はこれで完結なのですが、作者の思い付きによりもう一話おまけ（番外編）が続きます。それで最終話です。

## コ哀 番外編

「大丈夫かなあコナン君と哀ちゃん。」

まだ正午にもなっていない阿笠邸には、待ち合わせ時間よりも数時間前であるにも関わらず、探偵団の三人が既に揃っていた。結局三人とも二人が気になり、いてもたってもいられずやって来たのである。

ソファーに座り、博士の入れてくれた温かいココアを飲みながら、そわそわと落ち着かない様子で当事者たちの帰りを待つ。

「また喧嘩して、もっと悪化してたりしてな。」

がはは、と冗談めかして笑う元太に、歩美がキツと鋭く睨みつける。

「縁起でもないこと言わないでよ元太君！」

その歩美の剣幕に、元太は緩んでいた表情を途端に硬直させ謝る。誰よりも二人の行方を気に掛けている歩美は、もともと世話焼きで首を突っ込みたがる性質であるのはもとより、親友である哀のことが何より心配なのである。

そんな歩美に、向かいに座っていた光彦は苦笑する。

「大丈夫ですよ。歩美ちゃんがそこまで心配してるんです。あの二人にそれが伝わってない筈なんですから。」

「だな。俺らがこれだけ心配してやってんだから、仲直りしたらあいつらになんか奢ってもらわねえとな！」

歩美を元気付けようと明るく声を掛ける二人に、歩美は嬉しそうに

頷き返す。

そして、あ、と声を上げ、元太を見てぺろりと舌を出した。そんな歩美の愛らしい仕草にどきりとしつつも、元太は平静を装って尋ねる。

「ど、どうしたんだよ歩美。」

「ごめんね元太君。歩美、コナン君に電話したときに、“もし来なかつたら元太君に何本でも背負い投げしてもらおうから！” って言うちゃったんだ。」

「ええ！？なんだよそれ！聞いてねえぞ！」

「元太君。もしそうなったらコナン君に一生恨まれますね。」

素っ頓狂な声を上げ、思わず元太はソファからずり落ちそうになる。

歩美はごめんねーと謝りながらも、もしもの時はよろしくね！などと笑顔で言つてのける。

光彦は呆れたような表情で二人を見て、溜息を吐いた。

そんな三人の様子を穏やかな表情で見守っていた阿笠博士は、ふと窓の向こうに目をやり、ちらちらと白く舞うものを見とめた。

「おお。初雪じゃな。」

感慨深げにそう声に出した博士に、三人は同時に外の景色に視線を移す。

「わあっ。本当だ！雪降ってきたねー。」

「すっげー今年初めてだな！」  
「ホワイトクリスマスですね！」

弾かれたようにソファから立ち上がり、窓にへばり付くようにして空を見上げる。

輝くような笑顔で眺めはしゃいでいるその姿は、幼い頃のものとなりなく博士は優しげに笑んだ。

「灰原さんたち寒くないですかね……」

「あいつら傘持ってるのか？」

「分かんないけど……博士、哀ちゃん傘持って出ていった？」

「いや。持っていかなかった筈じゃが……」

ひらりと舞う程度のこの雪なら傘を差さなくてもあまり問題は無いだろうが、もし強くなってきたらそうはいかないし、一応届けたほうが良いかもしれない、と三人が話している。

博士は哀が手袋をして行くのを忘れたことを思い出し、傘を届けるなら手袋も持って行くべきかと顎に手をあてて考え、哀の手袋を取りに一人二階へ上がる。

そして二階の窓から何気なく外に目をやったその時。

雪振る中、手と手を繋ぎ穏やかな表情で歩く見慣れた二人の姿を見付けた。

その様子を見て博士は目を細め頷くと、手に持っていた哀の手袋を元あった場所に戻し、そのまま階下へと降りていった。

誰が二人に傘を届けるかでもめている彼らの大切な友人たちに、どうやら傘は必要無いようだ、と教えに行くために。

そして恐らくその言葉に不思議な顔をするであろう三人が、帰ってきた二人を、しっかりと繋がれたその手を見て、満面の笑みを浮かべるであろうことを予想して。

\* E N D \*

## コ哀 番外編（後書き）

お読み頂きありがとうございます！

これにてクリスマス小説完結です。

すっかり時期ハズレで申し訳ありません。

コ哀が番外編までついたのはかなり予定外でしたけど、何とか書き切れてホッと一安心です。

そう言えば話別の読者数を見ていたところ、一番需要が少なそうかなーと思った新哀が、今のところ一番多くの方に見ていただけているようで意外でした。

あと、この短編にはそれぞれイメージした曲がありまして、私の全くの独断と偏見ですが。

新志：白い雪 / 倉木麻衣

新哀：My gift to you / CHEMISTRY

コ哀：winter bells / 倉木麻衣

連れてって 連れてって / DREAMS COME TRUE  
とそれぞれなっております。

コ哀の曲だけ明るい感じなのは、やっぱり探偵団の力でしょうか笑。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7748f/>

---

聖なる夜に 君と

2010年10月10日04時42分発行